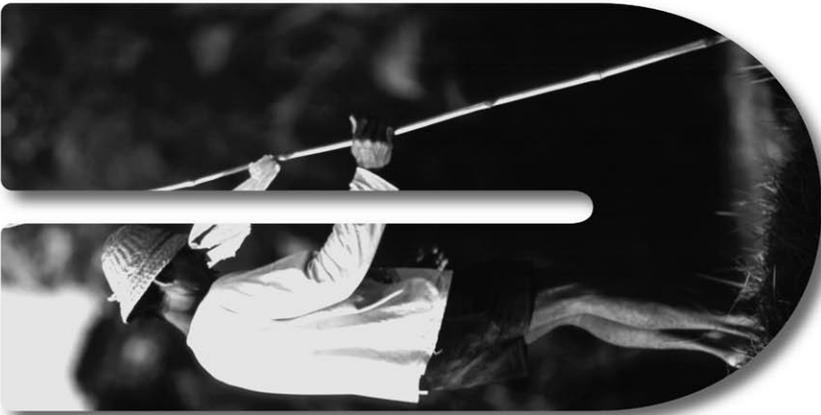


vol. 1

---

---

# 極樂通信



# UBUD



photo: Y. Hori

## Contents

Pendahuluan		Enak・Enak・Ubud おいしいものに目がない	
創刊にあたって	3	ナシ・チャンプール	16
Kabar Baru Berita Lama		Apa Itu? 噂話に耳がない	
SENGGOL 閉鎖	4	Pohon Kelapa	18
サテとバリ人	5	Tulisan Bersambung 連続エッセイ	
UBUDの花嫁	6	バリ人&インドネシア人?	20
結婚式< Upacara Kawin >	7	Gallery ギャラリー探索	
Belajar Tarian&Gamelan		I Gusti Putu Sana	21
私と踊り	8	Toko BEST店	
Laporan Koresponden Khusus		Kamar Sutra	22
雨期	9	Warung 味な店	
UBUDよろず百科		Kacu	22
Br UBUD	10	Pondok Manis 私の常宿	
Culture Shock		Pudja Arsri	23
所変われば・品変わる	11	Pesan & Kesan 旅人一声	23
Profil 人物紹介		その他のニュース	24
アノム	12	ウブんな人々	25
Dari Jepang		Studio スタジオ	26
バリ島へ行こう!	13	Pengummumaan 伝言板	26
UBUD イラストマップ	14		

## 創刊にあたって

伊藤 博史

『あつと～おどろく～為五郎～』が天上界にめされたと聞きました。さすがUBUD、いきなり精神世界の話と喜んだ人はいませんか。残念でした。これは、私が本を出版しようという遠大な計画を聞いた皆が「あつと～おどろく～」と奇声を発するのではないかと予測して先手を打っただけの話なのです。

為五郎、またの名を「ハナ 肇」が亡くなったことは、私の青春の記憶を少し震させてしまったような気がします。彼がリーダーをしていた、クレージー・キャッツは1960年代の芸能界を東奔西走していました。それは私の青春を色濃いのにしてきていました。クレージー・キャッツの映画「無責任男」シリーズと加山雄三の「若大将」シリーズは私の青春時代に同居しています。ここまでの話を理解できない若者は、近くにいる四十代の元若者に聞いてみてください。

私もUBUDの無責任男と呼ばれ続けて、早くも四年の歳月に突入しようとしております。友人ブリ・オカの二才になる娘グングもすくすく育ち、バリ語はもちろんのこと、インドネシア語、日本語も理解できるというのに、四才にもなる私は、いまだにインドネシア語も満足に話すこともできません。これはもう逆に、立派といってもよいのではないのでしょうか。(そんなことはない、と影の声) そんなことはない、やはり皆が言うように早くも頭の老化が始まっているのかもしれない。そんな私の頭の老化を防ぐために、本を出版することを考えたのです。いえいえそういうわけではありません。いったい本の出版目的はなんなのか、皆さんも疑問を持つことでしょうか。そこでお答えいたします。UBUD熱愛症候群の堀、エリ、コンビが将来UBUDに長期滞在を実現するため考えました。いえいえそういうわけでもありません。(本当のところは、なんなんだ?)とお叱りの影の声が聞こえてきますが、本当のところは…、本当のところは…、何も考えていません。またまたお叱りの影の声が、遠く、ガムランの音とともに聞こえてきます。

ただ本が出してみたいだけなのです。なんだそうなのかと、妙な納得をしないでください。しかし、出すからには少しでも、世の為、人の為に役立つよう。(なんて考えるはずもありません)そして、UBUDがいつまでも、素晴らしいUBUDでありますように願って、名称も恐れ多くも賢くも、そのものずばり『UBUD』として出版することにしました。やはり雑誌の名称は、小学館の「小学一年生」「中学一年生」というように、対象を一目瞭然にしたタイトルがバグースだと思います。UBUDをこよなく愛する人、UBUDのローカル・ニュースを日本に居ながらにして手に取るように分かる。これはUBUD病にかかった人々の、処方箋の雑誌です。この私の文章を読めばわかると思いますが、なにもこむずかしいことを書くつもりはありません。読者が積極的に参加をするという意味で、UBUD熱愛症候群による、UBUD熱愛症候群のための、UBUD熱愛症候群の雑誌とでもいいでしょうか。どこかで聞いたことのあるキャッチ・フレーズだなど、気が付いた方。そうです、1960年代をファッション界で一世風靡した、ファッション・メーカーVANの「若者による、若者のための、若者のファッション」というキャッチ・フレーズを真似てみました。

そんなこんなで結論はUBUD病の人々が集まり、好きなことをして楽しもうというわけです。ですから雑誌の内容も病気の症状によってフレキシブルになることでしょう。そういう意味も含めて読者の皆さんとしては大変楽しみなものになると思います。



## SENGGOL 閉鎖

1993年11月22日。4年の間ツーリストの胃袋を満たし、フレッシュな旅の情報を得るに絶好のスペースであったUBUDのSENGGOLが、ギャニール県の行政によって一時閉鎖をいわたされ、只今閉鎖中です。SENGGOLとは辞書にはジャワ語で触れる、当たるの意味とあるのですが、通常バリではインドネシア語のPasar Malamと同じ意味で使われています。理由は今のところ、わかりません。英語でNight Market。日本語に直訳すると夜市となるわけです。

2年程前にも、SENGGOLのワルンが取り壊され、整地されたことがありました。その時には、後にミュージアムが建つとの噂がありましたが、噂は噂のままで終わり、数日のうちに再びにわかづくりのワルンが建ち並びました。今度もそれかと思ひ、たかをくくっていましたが、今回は前回とは違い、SENGGOLの周囲には波トタンの塀が建ちはだかり、本格的な様相をあらわしています。

聞くところによると、ギャニール県の新任の県長が、かなり進歩的と言おうか革新的と言おうか、行動派の人ようで、街づくりはまず景観からと、1993年の6月には見通しをよくするという理由から、はみ出し気味の街路樹を切り倒し、道路と建物間に少しのセミパブリックスペースを作り、花壇づくりを奨励しているようです。ツーリストの目からみると、歩きの村人やツーリストがひとときの涼を求める日陰と緑がなくなってしまう、暑さが一層暑く感じるようになってしまいました。また建築物は新たに建てる場合は、駐車スペースを確保したり、数メートルのセットバックが義務づけられるようです。これに伴い、道路、側溝の整備もされだしました。JL:モンキー・フォレストは自動車が駐車禁止になりました。

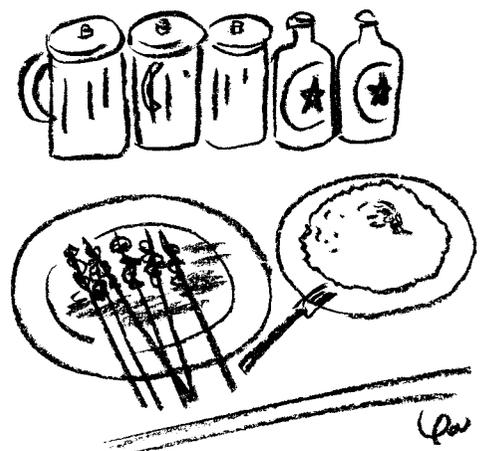
この資金は、ギャニール県が1993年8月より施行している、飲食税10%の税収入から運用されていると思います。ギャニール県の公共の建物が立派になっていくと同じように、SENGGOLもきつ

とこの収益で、スカワティのマーケットのような、コンクリートの建物になってしまうでしょう。噂ではワルンはクタのように建物のなかにおさまるそうです。そうすると値段も高くなりそうで、ツーリストには少し心痛い行政になるかもしれません。

UBUDのSENGGOLは、ケロシン・ランプがなにやら怪しげな屋台を浮かび上がらせ、あの悪名高い皮膚病の犬達がテーブルの下を徘徊し、雨ともなると足元は泥の海となってしまう、不衛生きまりなしといったところでした。しかしこのSENGGOLがツーリストにとっては、「これが東南アジアだあ〜ん」と興奮する観光名所ともいえるところでした。ツーリストや地元の人々との間には、きつといろいろな出会いがあったことでしょう。そんなスペースがなくなるのは非常に残念なのですが、バリがバリらしくあり、暮らしやすい街を作ろうとしていると信じて、SENGGOLが変わってしまうのは我慢しましょう。

皆様にもSENGGOLには、何かしらの思い出があると思います。人との出会い、恋愛、失恋など。その思い出での私記を募集しております。

題して「懐かしのSENGGOL」。



## サテとバリ人

サテ・ラギ・コハラ



photo: F. Komara

最初にバリを訪れたのは4年と少し前だった。一人で旅をし、まだ誰もウブドに友人がいなかった頃、コミュニケーションの唯一の場がセゴールだった。当然セゴールはオープンスペースであり壁はない。いろいろなバリ人、欧米人、日本人が騒いでいるのをながめながら、おもしろそうなテーブルにつく。そのテーブル（ワルン）で気に入った料理がなければ、隣のワルンから運ぶ。酒だけ、お茶だけオーダーしてもいいのだ。

現在ウブドには、バリの人たちと一緒にメシを"食える"場所がない。レストランは外国人ばかりだ

し、ナシチャンプル屋では酒を飲みながら騒げない。ウブドで一番美味しいサテをかじりながらアラックを飲み、バリ人と遊ぶ。これが最もバリを知る一番楽しい方法だった。雨の日も、雨もりのするビニール屋根の下で何時間でも待つ。ちょっと臭いが、街のすがたが見えてくる。

街がきれいになるのもいいが、ウブドと一番コミュニケーションできる場所がなくなるのは、ウブドで一番美味しいサテがなくなったことより悲しい。

## UBUD の花嫁

本岡 類さんの小説に、「ウブドの花嫁」(角川文庫)があります。ハネムーンで訪れたバリ島で、親切にしてあげたホテルのメイドから、不思議な力を秘めた聖獣バロンの銀の首飾りをプレゼントされるのですが、それは持ち主の願いを一度だけかなえてくれる幸運の首飾りでした。そして願いがかなえられれば、すぐに別の女性にプレゼントしなければ、今度は不幸の首飾りになってしまうというものです。ふとした縁で手渡されていく聖獣バロンの銀の首飾りが、次々と謎の事件にかかわっていく、四つの恋のミステリー小説です。

ところでUBUDには、UBUDの花嫁(日本人)がはたしているのかどうか、という好奇心をかき立てる疑問がわいてきました。そこで自慢の大江戸捜査網の出番というわけです。そして苦労のすえついに捜しあてました。プリサレン(王宮)を山側(Kaja)に入った、JL: Suwetaに1993年 Cokorda Gede Agung Darmayasa という王家の家系の青年と結婚したUBUDの花嫁がいました。それはもう似合いのカップルです。花嫁はバリ名を Jero Chabdrawati といい、健康で活発な都会っ子という印象を受けました。子供を生むのをUBUDの人々と同じように、産婆さんで生もうという心意気で望んだのですが、難産のため村の産婦人科で出産ということになりました。

そして、めでたく男の子が誕生しました。名前を Cokorda Gude Bagus Suryanata 君、日本名を百太郎君(ももたろう)というそうです。今年4月には、バリの暦で生後一年(210日)におこなう Oton という Upacara がおこなわれるそうです。

Jero Chabdrawati さんには、次回から「子育て奮闘記」を寄稿して載くことになりました。バリでの子育てのHOW TO、生活習慣が違えば、きっと私たち日本人のものの考え方と違うことが沢山あると思います。喜怒哀楽、いろいろなエピソードを乞うご期待といったところか。

(注: Jero というのは、Sudra 階級の女性が Triwansa (Brahamana, Satria, Wesia) の階級へ嫁いだ場合に

つけられる称号です。カースト外の人にも Jero という称号が用いられているようです。)

日本人の花嫁で、Peliatan に嫁いだ花嫁は、バリ好きの人なら誰でも知っているという程有名です。その他にも UBUD 近辺に嫁いだ日本人花嫁はいます。Tegallantang の花嫁、Campuhan の花嫁、Nyuhkuning の花嫁、Ladtunduh の花嫁、Mas の花嫁、Tegallalang の花嫁が、私の捜査網による確認情報です。私の伝え知らない未確認情報では、もっともっと沢山の花嫁がいるようです。日本人男性としては、Kedewatan に Gianyar 県でただ一人の花婿さんがいるようです。男性諸君も頑張りたまえというところでしょうか。

縁あって人生の伴侶をここバリで得た皆さんの、末永い幸福を心からお祈りしたいと思います。



picture: I. G. P. Sana

## 結婚式 < Upacara Kawin >

1994年、1月3日。この日、UBUDで新たに幸せなカップルが誕生しました。

新郎はニョマン君。UBUD生まれのUBUD育ち。がっしりとした体格と、人なつこい笑顔にほれほれしてしまう。そして新婦はみどりちゃん。神戸出身のどこかのんびりしているけれど芯は強そうな、とってかわいい女の子。

ふたりのおつきあいは長く、これまでに何度となくみどりちゃんがバリを訪れては、お互いの愛を確かめ合い（キャー、かっこいい!）、このたび晴れてご婚礼の儀となったのです。

実はふたりの結婚式は、当初10月に予定されていたものの、その頃、UBUDのある家で男の子と女の子の双子が生まれてしまったのです。

えっ？それとこれとどういう関係があるかって？これが大アリ。だってBALIのヒンドゥーでは、スードラ階級の夫婦に男と女の双子が生まれた場合、なんと村中がけがれてしまうらしく、村をあげてのお払いの儀式をしなければならず、その儀式がすむまでは村の寺院の祭礼や、各家のおめでたい儀式も延期になってしまうのです。当然ニョマン君とみどりちゃんの結婚式もおあずけ。そして、新たに式の日取りをバリカレンダーに照らし合せてみると…、

というわけで、1月3日にめでたく決定したわけです。

でも、この1月3日、日本では正月。そして恐怖の海外旅行ラッシュ。かわいそうに、みどりちゃんのご家族は飛行機のチケットがとれず、出席できそうもないという状態。

そこで、極楽通信『UBUD』の取材陣がドドーンと結婚式におじゃまして、ちゃっかり新婦側のお客になってしまったのです。

ふたりの結婚式は、とってもシンプルに、そしてとってもなごやかにとり行われました。日本の結婚式のような豪華さや派手さはないけれど、ニョマン君の家族、親戚、そして友人たちにかこまれて、照れながらも最高にうれしそうに微笑んでいたみどりちゃん。髪をシングル（頭のななめ後ろに、ぼつてりと丸く結うインドネシアの正装の時の髪型）にして、きれいなグリーン系のクバヤ（ブラウス）と、金刺繍のサロンを装った姿は、とても日本人とも思えず、もうすっかりバリの奥さん。緊張気味の彼女を気遣って、やさしく肩を抱いていたニョマン君のとろけるような顔。う～ん、うらやまピー。

おふたりの末永～いアツアツの幸せを、心からお祈りします。



photo: E. Sugawara



photo: T. Kohara



photo: Y. Hori

## 私と踊り

### Mansha

「自分の体を使って、何かを表現してみたい」と漠然と思っていたのが3年前。たまたま出逢った友人がBALI Danceを習っているというのを知り、なんだか分からないけど、「これだー!!」と思い、あれよあれよという間にBALIに来てしまった。

その時は、BALIについての知識はほぼゼロに近い状態で、BALIがIndonesiaの一部にあり、赤道を越えた所にあるという事も、出発間近に知ったわけで、ガムランや踊りについては言うまでもない。(実は、タイDanceを「BALI Danceだ」と思い違いをしていたのに気付いたのは、Sang AyuのLessonを受けてからなのだ。)

他にDanceを習った事もなく、初めて知る型、そして初めて耳にしたガムランの音を相手に、

「よく習えたなあ…」と、我ながら感心してしまう。とにかく熱血し易い私は燃えていた。

AndongからPengosekanまでJalang<sup>2</sup>しながら、ウォークマンでチョンドンの曲を聞いていたり、時々Sang Ayuに後ろからはがい絞めにされて走らされるしごきにも耐えていた。あの頃の青春していた自分が懐しい。

初めの何回かは、期間限定で来ていたから、強化合宿のような毎日だったが、最近は長期で滞在する様になって、それはずいぶん変わってきた。とりくみ方が変わったからだと思うが…。「きばらないこと」が私にはちょうどいい。(しかしSantaiしてやりすぎるとサボってしまうので、そのへんのかね合いが難しいのだが…)

一日の生活の一部に踊りの練習があり、帰り道の途中のワルンでEs Canpurを食べながらうだうだしゃべったり、夕陽に染まった空を眺めながら、自転車をこいでいて「きれいだなあ～」とったりできる事が嬉しい。

この間、K氏と話して「存在感のある踊り手」という言葉をきいて、それがいつまでも私の中に残っている。これからの課題になりそうだ。



## Musim Hujan (雨季)

頭の体操です。足立つ、彫り、草、世…に共通する言葉は何でしょう？ ピンポン、そうです、UKIです。しかし、UKIと言っても雨季と書くわけではなく、浮きと書くのが正解です。本文の雨季とはまったく関係ありません。

バリの雨季は悲惨で、毎日毎日雨はどしゃ降り、どこへも出掛けられません。ベッドのクッションは、手で押さえると水が染み出てくるほどジメジメとしています。そして衣服にはすぐにカビがはえています。だから賢いツーリストはタイ方面に逃げてしまっ、UBUDなどはツーリストはからっぽになってしまいます。

こんな噂がありますが、それはかなりいいかげんなデマです。確かにカビははえますが、すぐというわけでもありません。そして時には大雨が道路を川に変えてしまったり、大風をともなった雨が、ヤシの木を倒し道路を閉鎖してしまったりします。まあ、その程度のことはどこの国でもあることです。

そうそう、ヤシの木といえば、風で実が落ちるということを知りました。ヤシの木の下にいて、実が頭に落ちてきてけがをする人がいるそうです。けがではすまない人がいるかもしれません。ですからホテルなどでは、人が下を通るところなどは、ヤシの実を取ってあるようです。ロマン・チックにヤシの木陰で恋を語ろうなどと考えている羨ましいカップルさん、くれぐれも気を付けてください。時には、車の上にも落ちてきますので、これも要注意です。頭の上のヤシの実に気を取られていて、川になった道路で溺れないでくださいね。あまり恰好のよいものではないと思いますので…。

日本の寒い寒い冬を避け、UKI・UKIと心はずませて熱帯の楽園バリまで来たものの、毎日毎日雨ではせつかくの旅も哀しいものになってしまいます。根も葉もない噂を信じて、雨季にバリに行くのは絶対いやだという人がいるかもしれません。そこで、バリになり変わって、雨季についての正しい見

解を発表したいと思います。

バリの雨季は、11月～3月ということです。バリは大雑把にみて、山間部は雨が多く、海岸部は少ないようです。しかし、これも土地土地によってかなり雨の降る状況に違いがあるようです。UBUDは山あいの村ですから、雨は多い方だと思います。時には2、3日降り続くこともあります。毎日毎日というわけではありません。また、一日中降り続くことは珍しく、たいていはスコールのような大雨が一日に2、3時間程降り、あとは晴れることが多いようです。ずっと曇り空ということはありません。この合間をぬって洗濯物を乾かすのが、雨季を乗り切る極意です。また、衣類をあまり持たないのも極意かもしれません。また極意と言えば、この雨を3時間じ～と見て過ごせれば、もうあなたはUBUDを極めたも同然です。雨に霞む景色も美しく、木々の緑は豊かになり、花々の色はいつそう艶やかになります。目の前に広がるバリ絵画のような風景は、瞑想の世界に入ったような絶好の環境です。

雨季には雨季としてのよさがあり、楽しみ方があると思います。これもバリのすばらしい一面だと考えれば、何と楽しい旅ができることでしょう。

photo: Y. Hori



## Br UBUD

ところで、UBUD が好きで好きでたまらない UBUD 病のあなたに、一つお聞きしたいことがあります。UBUD っていったい街と呼ぶべきか、それとも村と呼ぶべきか、どちらか知っていますか？ きっとあなたなら知っていると思いますが、もう一度ここで学習しなおしてみることしましょう。人口、産業、面積などの社会科の学習は、次の機会にとっておくことにして…。素朴な疑問で、UBUD ははたして街か村か、はたまた郡なのかを調べてみましょう。UBUD がバリ州 (Benue) にあることは、今更学習する必要はありませんね。また、8つの県があり、そのうちギャニアル県 (Kabupaten) に属することも、今更言うまでもありませんね。

さて、ここからが学習です。ギャニアル県には、7つの郡 (Kecamatan) があります。そのうちのひとつが UBUD です。ですから、UBUD は郡ということになります。「な～んだ、UBUD は郡だったのか」と結論を急いではいけません。この UBUD 郡のなかに、8つの行政村 (Desa Dinas) があり、その一つに UBUD があります。ですから UBUD は村ということにもなります。「な～んだ、UBUD は郡であり村なのだ」と妙な納得をしないでください。またこの UBUD 村のなかに、13の集落 (Banjar Dinas) があります。その Banjar (バンジャール) にも UBUD があります。(この後バンジャールのことを Br と記します。) ですから、UBUD は Br の名前ということにもなります。「そうか、UBUD はやっぱり Br だったのか」と、わけのわからないこ

とを言わないでください。UBUD には3つの Br が、Kaja (山側)・Tengah (中心)・Kelod (海側)にあります。それぞれ、Br UBUD Kaja・Br UBUD Tengah・Br UBUD Kelod と呼ばれています。そのほかの Br は Padangtegal に4つ、Taman には2つ、Tegallantang、Junjungan、Bentuyung、Sanbahan に各1つの Br があり、合計13 Br ということになります。

これは余談ですが、居酒屋「影武者」が発行している UBUD のイラストマップには、UBUD の13の Br が網羅されていません。それなのに、Br Peliatan、Br Pengosekan など他の Br が入っています。それを発行責任者に指摘したところ、「まあ、これは観光ガイドマップということで納得してください。」とうすい頭を下げておりました。

バリには、行政村以外に、慣習村と呼ばれるものがあります。この慣習村のことを Desa Adat といいます。そして、集落として Banjar Adat があります。バリ・ヒンドゥーの儀礼は、今でもこの慣習村の組織や Br の組織で行われているようです。

普段、私達ツーリストが UBUD と言っているのは、行政が施され整理されてからの行政村としての UBUD なのか、それとも慣習村としての UBUD なのか、はたして、どちらなのでしょう。まあ、あまり気にしないで使っているようですが、どちらにしても私達ツーリストには、あまり問題のない疑問のようですね。UBUD はやっぱり UBUD と、わけのわからないことを言って煙にまきます。

結論としては、広い意味での UBUD は、UBUD 郡または UBUD 村を指し、狭い意味での UBUD は、Br (集落) としての UBUD を指しているということです。

ちなみに、街というのはインドネシア語で Kota といい、県庁所在地の都市のことを言うようです。例えば Gianyar や Singaraja などは Kota といい、やはり街という感じがするところです。そして、街というよりは歓楽街と呼ぶにふさわしい Kuta は、なぜか村なのです。

またまた、わけのわからないことを言って、今回の学習を終わりとします。



## 所変われば・品変わる

バリでうけたカルチャーショックは数々あるが、そのなかでも素手（右手は清浄）での食事と、素手（左手は不浄）でのトイレには、思わず両手を合わせてしまいました。

すでに、素手での食事とトイレを経験されたあなた、あなたは偉い！ きっと、バリのよき理解者の一人だと思います。そしてまだ未経験のあなたも、是非一度お試しください。

所変われば品変わるで、欧米人はフォーク、ナイフ、スプーンを使って食事をします。日本人は箸を使って食事をします。バリの人は右手（素手）を使って器用に食事をします。この素手での食事を不潔だと言う人がいますが、それは間違った感じかただと思います。国が違えば習慣も違うものです。欧米人はハンバーガーを素手で食べます。日本人はあの高価な寿司と、日本人の心ともいえるおにぎりを、素手で食べるではありませんか。また必ずしもフォークや箸が清潔とはかぎりませんが、手をよく洗えば、清潔さから考えれば同じような気がします。そして手と食べ物間に何も媒体がないということは、不思議なもので、指先で味が感じられるようになります。そしてより一層美味しく食べられます。なに信じられないって、そう言わずにあなたも経験してみてもいいですか？

バリではその昔、バナナの葉を皿にして、素手で食事をしていました。食事が終われば、小川で手をすすぎ、バナナの葉の皿は、再び自然に帰ります。飲み物は、取り立ての椰子の実、果汁を実から直接のどへ流し込みます。実に自然と一体という感じが嬉しいです。

もう一つ試してみたいものがあります。それはトイレです。現在、ホテル、レストランなどは洋式水洗トイレが主流のよう

です。一般家庭では、最近までトイレは川でした（今でも川のところはあります）。しかし今では、かつての日本と同じように座り込みタイプのトイレが普及してきているようです。それも水洗ではなく半水洗とも呼ぶべきか、手おけで水を汲んで流すというしるものです。この半水洗がトイレの後始末にたいへん便利なものなのです。

あなたはトイレット・ペーパー派ですか？

それとも、私と同じように素手派（変な言い方ですが）ですか？ トイレット・ペーパーもよいのですが、一度、素手でお試しになってください。大きな声では言えませんが、痔を患ったことのある私にとっては、この素手での後始末がTO-TOウォッシュレットの世界で実に爽快で心地良く、癖になってしまいました。紙を使わないため、省資源にはなるし、おしりには優しいし、一挙両得といったところか。また水洗とは違って、手おけの半水洗のため、水の節約にはなるしと、も～たまりません。

バリの自然を残すために、私たちもバリの人々と同じような生活を試してみたいかなのでしょうか。きっと地球に優しい生き方ができると思います。合掌。



## Anak Agung Anom Putra

この世には、アート＝芸術と呼ばれるものが存在する。音楽、絵画、舞踊…、ありとあらゆる種類の方法を使って、人々はアーティストになる。アーティストの自己表現能力があるレベルまで高揚した時、そこには神の存在が見える。

アノム。

神々の棲む楽園・バリ島に生まれることを許された、ひとりのバリ人。

彼は踊る。あの美しい、人間が人間以上に美しく見える、バリの踊り。一度でも彼の踊りを観た人は、身体がふるえ出すような感動に襲われる。なぜ、ほんの十数分の踊りに、こんなにも心が奪われるのだろう。人々は異口同音に彼の踊りを誉め讃えるが、それは彼を通して、人々は"神"のスピリット("神"というのに抵抗があるなら、"超自然"としてもいい。)を感じ、それに共鳴するからだ。ダイレクトに自分のハートに。

今まで世界中に、たったひとりでダンスを踊り、観る人々をこれほど感動させたダンサー(アーティスト)が、いったい何人いただろう？

今、現代文明の中に生きている私達は、他人の創り出すアートに、これまで人生の中でこれほど純粋に心を揺り動かすことが、いったい何度あっただろう？それも涙を流すほどに。

アナツ・アグン・アノム・プトラ。

UBUDのある貧しい家に生まれ、小学校の制服以外服が買えず、時には氷売りの手伝いなどをして、ささやかな生活費を得ていた。彼の父は村で人気のトベン(仮面)のダンサーだったが、その頃のアノムは、もちろん踊りなど習う余裕はなかった。そこで彼の生涯の「母」(幼い時に実母を亡くした彼は、こう呼んでいる)アイリーンと出会う。アメリカからBALIに魅せられてやってきたアイリーンは、アノムに学費の援助をし、バリのダンスを習うようにすすめる。今までダンスはおろか、他の子供達と同じように遊びまわることのなかった彼は、これを使いにとりつかれたようにバリ・ダンスを習いはじめる。この時、彼は10歳であった。

みるみるうちに才能ある彼は村中で評判になり、コンテストで次々と優勝し、ついにはバリNo.1に輝く。

その後、彼はコカール(芸術専門高校)からASTI(現



photo: T. Kohara

在のSTSI＝インドネシア芸術大学)まで、政府の奨学金を得、トップの成績で卒業する頃、自分が創立者のひとりとなって「スマラ・ラティ」を結成する。この頃までにアノムは、すでに何度も海外の舞台を踏み、人々を感動の渦に巻き込んでいる。

今までの古い村の慣習にとらわれたガムラン組織とは全く異なる、純粋に「真の芸術性を求めて」活動するプロフェッショナル集団「スマラ・ラティ」は、それゆえに、村の古い組織の協力を得られず、UBUDの中で、定期公演の会場も自分達でさがさなければならなかった。

しかし、スマラ・ラティを、そしてアノムの踊りを観た人々の、限らない賞賛によって、1992年、念願であった日本公演を果たす。

縁あって、この不思議な地バリとめぐりあい、アノムの踊りを、今、この目で観られることを神に感謝したい。彼を通して、その神の存在を、はっきりと感じとることができる。

アノムはスピリット・オブ・バリ、そのものなのだ。



## バリ島へ行こう！

平島 幹

極楽通信発行、おめでとうございます。バリ・フリークのわたしとしては、ライブのインフォメーションが、ウブドから発信されるというのは大層嬉しい。今後の大発展をこころより願ってやみません。

さて、バリ島について何か書け！という、ほとんどどうも言わせぬウブドのドン、パ・イトウ指令に年末から頭を抱えているわたしです。2冊の本（僭越ながら、バリ島について本を書かせていただいています。買ってください）に書いたこと以外のなにを書こうか、困りました。どうしましょう。などとぶっっている場合にはありません。さて…。

やっぱりわたしがバリを愛する理由、大変個人的なことを皆様にお伝えるのがよからうと思いません。

まず、なんといってもバリ・マジック。ホワイトもブラックもいっしょくた、マーブル模様のマジックの嵐。あるんですよ。バリには歴然とマジックが生きている。わたしが推察するに、実のところ、東京やニューヨークやメルボルンやパリやロンドン、人間の生きる場所には、マジックが渦巻いていると思うのですが、まったく不可視です。目に見えない。手に取れない。肌に感じない。実体験はむづかしい。それをバリでは体験できます。非常に身近に日常として、非日常のマジックを見ることができて、取り巻かれ、翻弄され、苦悩し、くたくたに疲労して気を緩めると。結果、なにが起こるか。

閉ざされていた扉が開きます。スピリット、マインド、あるいはソウル、または言葉に出来ない自分に潜む闇の世界が一気に溢れ出します。おそろしい我が身の本性が露わになります。狂いそうになります。悪霊が憑きます。のたうちまします。暴れます。その様はまるで化け物です。自分という名のお化けです。その恐怖と戦慄はスリラーあるいは、サイコ・サスペンスどころの騒ぎではない。生命の存続にかかわる一大事でもあります。

あまりにも抽象的すぎて、いったい何がなんやら理解しがたいことを書き連ねていますが、バリに通いつめれば、きっとあなたもいつかマジックの虜になるでしょう。そしてはじめてヒラシマの書いている意味不明の抽象的発言を体験し、納得すると言い切りましょう。バリはそんな場所です。どのような

形であれ、自分が露になる、世界でも類をみない不思議な場所です。そういう地場です。それがバリです。

やがてマジックの嵐は去ります。それは少しの前触れもなく。潮が引くように、ひたひたとした静かな去り方です。祭のあと、ひっそりとしませ。穏やかさが戻ります。

するとわたしはすっかり癒されています。健康な精神になります。そして思うのです。気付くのです。実は自分はひどい病気にかかっていたのだと。自分でも気付かない間に、流行病に侵されていたと。バリの地で、マジックという名の毒が、わたしを癒してくれたのだと。毒こそが、バリのメディスンなのだ痛感するのです。

わたしはここからバリを愛しています。いとおいしいと思っています。ありがたいとも思います。バリの景色がどんどん変わろうと、文明が入って賑やかになろうと、ツーリストティックになろうと、なにがなんでもバリはバリ。わたしを癒してくれた場所。

バリの人の大半はお調子もので、エッチで、ずるくて、うそつきで、したたかで、非常識で、臆病で、マジックまで操って、神様にまであれこれおねだりして。わたしは嘘をつきません（なんて、嘘）。バリの人って本当にそうなのです。でも、それを許しきって島のおおらかさ、潔さ。なんて素敵なことでしょう。人間は実はそんなものだと。うそつきであたりまえ、自分の利益しか考えないのがあたりまえ。ずるいのがあたりまえ。悪も善もいきいきと躍動しているのが自然で、自由なのだバリは主張している。生きることは、とてもラクチンで気分いいことだと主張している。

さ、皆さん、どんどんバリへ行こう。バリで自分をよく見ましょう。きっと自分の秘密の5分の1くらいは見えてきます。自分にとってなにが大切でトクになるか見えてきます。と、もっと愉快になれますよ。もっと楽しくなりますよ。これは本当。

ほら今日も、椰子の樹が葉を揺らし、おいでおいでと人と呼ぶ。バリは甘露な毒の島。その毒を浴び、一層楽しい毎日をヒラシマと、パ・イトウ、ユミちゃん、そのほかの変わりもののバリ・フリークたちとともに過ごそうではありませんか。





## ナシ・チャンプール

このたび、めでたくこの情報誌「UBUD」が創刊されるにあたって、私、Enak Agung Ayu Okawari、通称エナちゃんが、「ENAK・ENAK・UBUD」のコーナーをうけ持つことになりました。「ENAK」とは、インドネシア語で、「おいしい」を意味することばです。ちなみに発音は、エナッ、最後のKは、のどの入口でとめてしまいます。日本語でも、「おいしい」ということばは、たべものを称賛することの他に、おいしい仕事、とか、おいしい男(?)とか使ったりしますが、インドネシアでも、そんな感じで使ったりもします。たとえば「Aduh! Anginnya Enak.」は「う〜ん! 気持のいい風だ〜」なんて言ったりします。でも、このコーナーでは、もっぱら食べものに関して、ということなので、このタイトルは、とりあえず「UBUDにおける、気持のいいコトいろいろ」ではなく、「UBUDにおける、おいしい食べものいろいろ」という解釈をしてください。

さて、どこの国や地方でも、『食』は、その土地の文化や習慣とおおいにつながりがあり、というより文化そのものとして、よその土地から来た人間にとってはこのうえない魅力にあふれているものです。ましてや日数限られた旅行の貴重な食事、これはもう食いしん坊にとっては非常に大切な楽しみでもあります。皆さんの中には、UBUD、いえインドネシアの『食』に関して、すでにめっぽう詳しい方々もいらっしゃると思いますが、そんな方々もこの「ENAK・ENAK・UBUD」を読んで、おおいに懐しんでいただきたいと思います。

前置きがずいぶん長くなりましたが、この創刊号では、早々に「ナシ・チャンプール」に手をつけちゃいます。

「ナシ・チャンプール」、ああっ! この甘いひびき、う〜ん、いいですねえ。このナシ・チャンプールはバリだけでなくインドネシア全国で、国民的英雄と言ってもよいほど、民衆に愛されているものです。そして、その地方の食文化の特徴が、よくあらわれている、楽しい食べものです。そもそもナシ・チャンプールとは、直訳すると「混ぜごはん」ですが、実は、これは白いごはんの上にいるんなおかずが少しづつのかった、いわゆる「インドネシア版お手軽定食」で、これひとつで、じゅうぶん満足のいく食事が楽しめるのです。

ツーリスト向けのレストランでもよくお目にかかるメニューのひとつですが、たいていそういうレストランでは、大きな皿の真ん中に、ポコリときれいに型取られたごはんのまわりに、野菜や肉の、お上品な味付けのおかずがこれまたお行儀よく並んでいる、という品行方正なお嬢ちゃまのようなルックスで登場します。しかし!! 地元のバリ人御用達のナシ・チャンプールは、たいていワルン(屋台)に毛のはえたような薄暗い食堂で、それも他のメニューなんていっさいなく、ただただ忠実に、ナシ・チャンプールのみに勝負、という店で求めるのがふつうです。

店の奥にしつらえたガラス張りの棚に、で〜んと皿に盛られたおかずがいくつか並べられ、「あ、おばちゃん、ひとつね」とか言って席につくと、まず、皿に大盛りのごはんがドン!と入り、おばちゃんが棚の中のおかずを、手で少しずつごはんの上のせてくれます。みなさんもお存知のように、ここでは左手は不浄のため使われませんので、右手だけを使ってとりのモモ肉なんかを、器用にむしりとってくれます。

そして、「ハイヨ！」と出てくるナシ・チャンプールの、何の気取りもてらいもなく、レストランのそれと比べると、どう見てもガサツなイナカの土木作業員といった風貌ですが、これがまた素朴な魅力にみちあふれていて、なんともソソられるものなのです。

ここでおかずの説明に入りますが、なんといても数えきれないほどあるおかずの種類をひとつひとつとりあげていっては、次回からのこのコーナーのネタがなくなるので、簡単にのべておきましょう。

バリのナシ・チャンプールに入ってくる、代表的な、平均的なおかずとしては、まず何はなくとも卵。たかがゆで卵とあなどってははいけません。ゆでたあとに、何種もの香辛料及び調味料でさらに煮込み、なんともいえない風味と、ほどよい塩かげんになっている、絶品モノです。たいてい、タテに二つ割りにして出されます。これが入っていないとエナちゃんなんか不機嫌になってしまうほど、Enakなのです。次に肉。スパイシーに揚げるか煮込むかしたものが2～3種類。そして野菜料理が1種類。時々、野菜たっぷりのヤキソバなどにもなります。その他、タフ（固い豆腐）やテンベ（大豆の加工食品）がのってくる時もあります。そして、メはチャベ。唐辛子と、にんにく・トマトなどを、石のすり鉢でつぶし、油でドロドロになるまでいため煮した、唐辛子ソースといったものです。これはほんの少しだけつけてくれるのですが、これがクセモノで、辛いものに慣れていない舌には、ちょっと強烈です。以上のおかずを、白いごはんといっしょにバランスよく食べるのがコツです。上にのったおかずばかり先に食べてしまわないよう、心くばりが必要です。もっとも、「おばちゃん、肉もうちょっと入れて」と追加注文もO

K、ただし、料金はUPになります。

さて、このナシ・チャンプールの、このように店で食べるのもいいのですが、エナちゃんがぜひみなさんにおすすめするのが、「Bungkus」（ブンクス---包むの意）つまり、「お持ち帰り」です。「Minta bungkus satu」ひとつ包んでね、と最初に言えば、長方形の紙を器用にくるっと逆円錐形にして、一食分を包んでくれます。昔は紙ではなく、バナナの葉っぱで包んでくれたものです。そしてその「Bungkus」を、自分の家なり、ピクニックなりへ持っていき、おもむろにガサガサ開いて、スプーンなど使わず、手で食べることのおいしさといったら！

エナちゃんの友人で、このナシ・ブンクス（ナシ・チャンプールをブンクスしたもの）にやみつきになり、日本へ帰る飛行機の中でこれをやったうら若き美女がいましたが、ガルーダのステュワーデスさんが目をまるくして驚いていたそうです。

いやはや、そんなわけで、ナシ・チャンプールの魅力を書き出したらとまらなくなりそうです。UBUD周辺には、エナちゃんの知っているかぎりでは、このような地元バリ人御用達ナシ・チャンプールの店は少なくとも10箇所はありますが、きっともたくさんあるにちがいません。いずれ、別の機会に、ナシ・チャンプールのマップは、おひろめすることにして、とりあえずみなさん、ご自分でお気に入りのお店を捜してみてください。お値段は、ひと皿1,000～1,500Rpといったところ。なかには日替わりでおかずを出してくれる店もあって、あきることがありません。ほらほら、あなたも食べたくなってきたでしょ？

ナシ・チャンプールの、偉大なひと皿、どうぞおためしあれ！

## Pohon Kelapa

UBUDの田園風景を見て、日本の田舎を感じる人が多くいます。確かにそうかもしれません。しかし、おおきな違いが一つあります。それは椰子の木です。高くそびえる椰子の木が南国情緒をかもし出し、椰子の木々のシルエットがいつそう朝焼け、夕焼けの彩りを美しくしているのが印象的です。この椰子の木がBALIの重要なイメージ・ポイントとなっている気がします。椰子のことをインドネシア語でKelapa、バリ語でNyuh (Klapa)。モンキー・フォレストの南にある村、Nyuhkuningは黄色い椰子という名前の村のようです。きっと沢山のNyuh Kuningが実っていたのでしょう。

私がUBUDに滞在してまもなく、バリニーズのワヤン・カルタと知り合い、彼の家で庭先でもてなされた椰子の実が誠に印象的であり、且つカルチャー・ショックでもありました。それはまさに自然そのものという感じです。カルタのお父さんが枝のない椰子の幹を抱きかかえるように、幹の凸凹を利用しながらスルスルッとあの10メートル以上はあるという高い椰子の木に、軽やかな手さばき、足さばきで登ってしまいました。両足首は20センチ程離して結ばれた紐がありました。これが滑り止めの役目をしているようです。そして椰子の実を二つ落としてくれ、それをカルタはナタで器用に飲み口をつくり、果汁を飲むように私にすすめてくれました。飲み方は椰子の実を両手に持ち、それをたかだかと持ち上げ、口をつけずに口元に流し込むのです。初めは慣れないため目標が定まらず、顔にかかったり服にかかったりと悲惨でしたが、すぐに慣れ、甘酸っぱい果汁を口いっぱい流し込むことができるようになりました。このダイナミックさがターザン・チックで非常に心地好いものです。まわし飲みするうちに空になった椰子の実は、二つに割られ、殻の内側についている果肉を椰子の実の皮で作ったス

プーンでこそぎ落としながら食べるのです。これがまた格別美味しいことスカリ、贅沢な体験をすることができました。

この椰子がBALIでは実に多種多様に使われ、まさにBALIの文化はKelapaの文化でもあるようです。インドネシア語で頭のことをKepalaといいますが、Kelapaの語源がKepalaといわれるように、いかに椰子が重要視されているかがうかがわれます。

椰子はBALIのヒンドゥーのあらゆる宗教儀式にかかせないもののようで、実も葉もあますところなく使われているようです。そのほか生活にかかわるものすべてといってよい程、利用されています。果汁は言うに及ばず、やはり果肉も美味だし、果肉をおろしがねでおろしたものは、料理、デザートなどに利用されます。おろしたものに水を加え絞ったものは、ココナッツ・ミルクとしてライスプディングなどに使われます。また椰子油も作られ、料理油や燃料として使われ、髪をしっとりさせるために塗ったりもするそうです。そういえば、石鹸も作られています。Arak、Tuakなどの地酒も作られます。Home Madeの酒は各家々で味が違い、酒飲みには格別の楽しみの一つです。近頃では果肉をおおう固い殻に彫刻や絵がほどこされ土産物として売られています。また炭にして、サテを焼く時などの燃料にもなっています。外の皮は裂いてたわしにしたり、

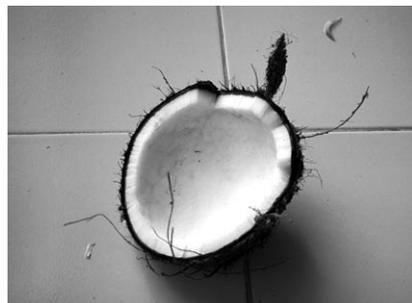


photo:E. Sugawara

燃料にもなります。レンガ工場、瓦工場などでは大量に燃料として使われているようです。繊維部分は紐や敷物などを作ります。

BALIの椰子はほかにグラバリ（グラメラ）といわれる黒砂糖を作る種類の椰子や、祠の屋根を葺くのに使われる棕櫚など、そのほかいろいろな種類の椰子の木があるそうです。そうそう、そういえば小学校2年生の教科書で、やはり利用価値の高い椰子の木の話が載っていました。幹はもちろん家を作ったり、橋を作ったりします。葉の部分は編んでいるいろいろな飾りものを作ります。葉の芯の固い部分は、まとめてほうきになります。ということが載っていました。ここでもやはり椰子の木は重要なものだということを子供達に教えているのでしょう。

椰子の木は、木というよりは巨大な草という感じですか。やはり南方特有で年輪はなく、中心部はカサカサで釘も止まらないくらい弱いため、一本まるごと使うか、それとも縁を板材か角材として使っているようです。中心部のカサカサとは反対に外は非常に固い繊維質があり、ノコギリ、カンナの刃がぼろぼろになってしまうほどです。

椰子の木々が豊かに繁っていたこのUBUDの村にも、最近、観光化の波が押し寄せてきました。村人は椰子の木々を切り倒し、バンガローやレストランや土産物の店を建て始めました。今ではずいぶん賑やかになったモンキー・フォレスト通りでホームステイを営む家々の庭にも、昔は高い椰子の木が何本もすくすくと生えていたものです。そんなあるホームステイのイブ（お母さん）が私にこんな話をしてくれました。

「昔、タム（観光客）も来ない静かな村だったころ、ほら、あのタムの部屋あたりには7～8本の椰子の木があつてね。その実を取ってはパサール（市場）に売りに持っていったもんだよ。貴重な我が家の収

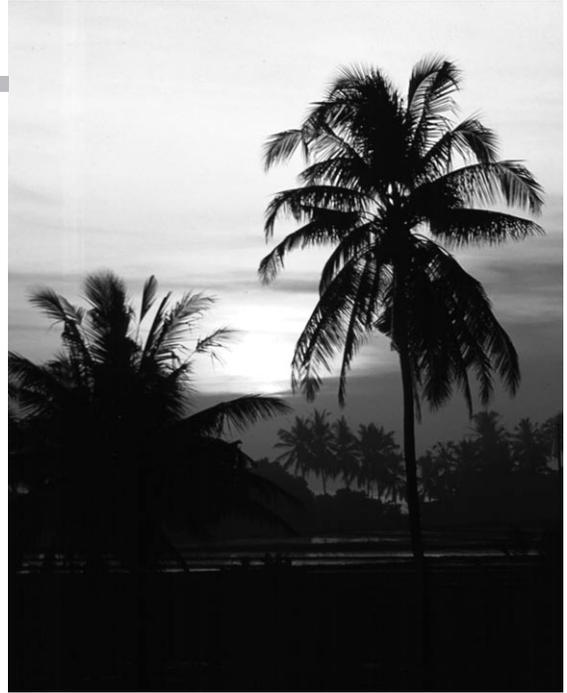


photo: Y. Hori

入源だったね。ところが今じゃ、たとえ庭に椰子の木があったとしても、お父ちゃんももう年だし、5人の息子の誰一人として、あの高い椰子の木に登れるものはいないんだよね。まあ、今は椰子の実だけの葉だのは、パサールでも売っているし。ああ、ちょっと高いけどね。でも、おかげさまでこうやってホームステイを経営して、ごはんはなに不自由なく食べられるし、幸せといえば幸せかな。」

その遠くを見るように話すイブの目を見てみると、昔の椰子の木々が今よりうんと沢山繁っていた、UBUDの景色が私の目にも鮮明に映し出されるような気持ちになったものです。私たち観光客がこんなことを言う権利はないかもしれませんが、あまり沢山の椰子の木が切り倒されるのは僣びないものです。椰子の木はBALIの永遠のアイドルとして、私たちの心を癒してくれるために、そして、BALIの人々の生活のかけがえのない自然の恵みとして、いつまでも、ここBALIに元気にそびえたっていてほしいと思います。

あなたは、ジュース？ それとも、Arak？  
どうぞ、どちらでも、手にとって、さあ、  
「ウルトラ・マルチ・スター、Kelapaさんに乾杯！」

## バリ人&amp;インドネシア人？

大久保 一郎

司馬遼太郎などによれば、坂本竜馬は幕末の時代に生きた数少ない「日本人」だった。ある意味では、竜馬と海援隊の面々だけが、当時の日本に存在した「日本人」だったといえるのかもしれない。

むしろ、ここで言っているのは、通常の意味での日本人ではない。列強からの圧迫の中で「日本」の統一性を自覚し、これを確立するために生きたという積極的な意味で、さらには幕藩という旧来の枠組から遊離しているというネガティブな意味で、かれらは固有の「日本人」であった。帰属意識あるいはアイデンティティのありかが、この場合の「日本人」に関してキーとなる点である。

その意味で、勝海舟をはじめ若干の例外はあるが、幕臣はもちろん、薩長などの雄藩の志士の中にも、「日本」という地平線を自覚的に希求しつつ大地を駆けめぐった者はすくなくなかった。またその「日本」像をおどろくほど明確にイメージしていた点で、竜馬はとびぬけた存在だった。竜馬のような国際感覚にすぐれた者によってはじめて、将来あるべき日本の内部構造が描かれた。あとの人々は、まず「薩人」であり、「土佐人」であり、あるいは某郷の某村人、であったといえる。

さて、こんな話からはじめたのは、バリ人ははたして「インドネシア人」なのだろうかとか日頃から疑問に思っていたからある。むしろ通常の意味では、つまり国家への帰属という点では、この点に疑問の余地はない。しかしながら上に述べたような、いってみれば実存としての帰属意識の点を考えると、バリ人はまずもって「バリ人」であり、「インドネシア人」ではない、といいうる傾向があるのではないだろうか。すくなくとも私の知るバリ人の多くは、「インドネシア人」であるよりもつよく「バリ人」であったり、あるいはとにかく「バリ人」として生きている。

おそらくこのアイデンティティの問題は、つかわれる言葉と密接な関係がある。たいていのバリ人は、インドネシア語をつかえるものの、物事を考え感じるときには、バリ語の世界にいる。おそらくインドネシア語で考え感じる、つまりその人のセンスというものがインドネシア語に根ざしているといえるのは、ジャカルタと地方都市に住む人々だけであろう。しかしながら、これからはそうした「インドネシア人」がインドネシアのさまざまな土地に増えていくであろう。学校教育やマス・メディアが、インドネシア語をこれほど普及させているのだから。そして事実、バリ人の中にも、いわば「インドネシア人」的な面をもった「バリ人」が増えてきているように感じられる。

ただし、この「バリ人」とか「インドネシア人」というのは、あくまで指標であり、問題を明確にするための目安である。それは all or nothing の問題ではない。つまり「バリ人」が「インドネシア人」になるという単純な移行の図式で捉えるべきものではなく、もっと微妙で複合的なものなのである。

またそれはいいわるいの問題でもない。バリ人がバリの「伝統的」な生のスタイルの根にある、バリ人としての帰属意識を変質させていくことを、誰もとめることはできないし、とめるような類いの問題でもない。おそらくいましばらくは「バリ人」性は残っていくだろう。しかしそれは微妙なところで現時点でのものとはちがっているかもしれない。その変質は深いところで静かに進行し、ある時点で唐突に表面化するものであろう。そして変質の不断の連続が、民族の歴史なのかもしれない。

# Gallery

ギャラリー探索

## I Gusti Putu Sana / Art Gallery

ブンゴセカン、ウブドゥの南に位置する田んぼの広がる静かな村。一見何も無いのかなこの村は、なにをかくそう才能あふれるアーティストがゴロゴロしている。ウブドゥのギャラリー（おみやげ屋も含めて）をのぞくと、どこも似たような絵が飾られていて時々うんざりすることもあるが、どうしてどうして、いるところにはいる。それも「う〜ん」とうなってしまいう程すばらしい絵を描くアーティストたちが…。

ここで紹介する、イ・グスティ・サナ氏も、彼独特の画法で他のペインターとは一味違った傑作を次々と生み出している、すぐれたアーティストの一人だ。彼の描く絵は「ファンタジー」そのもの。バリの昔話（おとぎ話）からテーマをとり、細かい細い竹ペンとチャイニーズ・インクで、細かいディテールまで丁寧に描き上げる。今、彼の得意としているのはカエルの絵だ。ちょっとグロテスクにもみえるカエルが、ラーマーヤナ物語のヒーローになったり、バリ・ダンスの衣装をつけた踊り子になったりする。他にもエロティックな人間（神様？）の男女のからみあいの絵もある。これはまったくエロティックだが、不思議といやらしさを感じさせない。「どこか



らこんなアイデアが…」と絶句してしまうほど、彼の作品は幻想的で、じっと見ていると自分の意識まで彼の描き出すファンタジーの世界に入り込んでしまう。そう、ナチュラル・トリップができるのだ。彼の絵に魅せられた外国人のファンも多く、遠くハワイから「また描いてくれ」と注文が来る。BALI 絵画を紹介した本にも彼の絵は必ず載せられる。彼のスタジオ（家）に行けば、その数々の傑作を見ることができる。気に入った絵があれば、良心的なプライスでゆずってくれる。ブンゴセカンのをんびり散歩しがてら、彼のスタジオに立ち寄ってみよう。

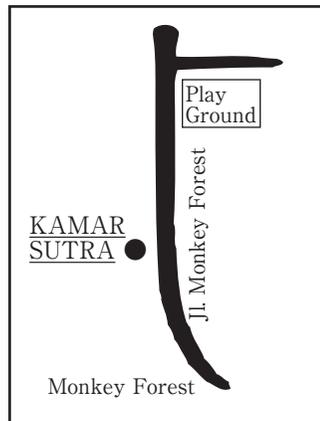
彼の、そしてバリの、湧き出て枯れることのないすばらしい才能がこの目で見られるのだ。



Toko ◇ BEST 店

Kamar Sutra

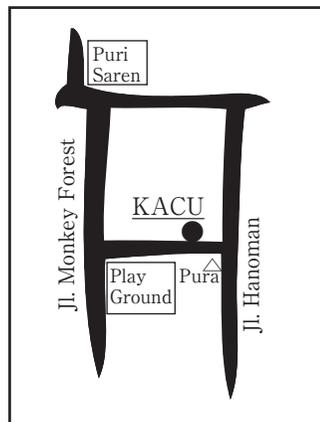
モンキーフォレスト通りの中ほど、よく知られたレストラン「カフェ・ワヤン」の入口に、こじんまりと建っているのが「Kamar Sutra」。シルクの部屋という意味だ。店内には、趣味のよいアンティークの家具を使ってディスプレイされた、シルクのスカーフ、パンツ、スカート・・・、どれも手描きのバティック（ろうけつ染め）のシックでおしゃれなものばかり。縫製もしっかりしている。色は、全体に落ち着いたカラーにおさえられ、モチーフも、昔ながらのジャワ更紗をアレンジしたものや、Kamar Sutraのオリジナル・ロゴをあしらったものなど、洗練された大人の女を装うにはぴったりだ。というのも、この店のオーナー、ディナさんはジャワ出身の、インテリジェンスあふれる、とても美しい女性で、ヨーロッパで生活していたこともあるという。彼女のセンスのよさは、この店の商品を見れば納得！もし彼女が店にいたら、商品を選ぶときのアドバイスをしてもらおう。そもそもシルク専門店の少ないBALIで質もセンスも二重マル！といえるシルクものをさがすのは至難のワザだが、ここなら安心。美しき日本女性たちよ！自分のためのとっておきのおみやげとして、このKamar Sutraでステキな一品を選んでみては？



Warung ◇ 味な店

Kacu

「そろそろレストランのナシ・ゴレンにもあきたなあ・・・」と言いながらおなかをすかしているあなたに、ぜひおすすめしたいのがナシ・チャンプルー。「ENAK ENAK UBUD」にもご紹介したとおり、この愛すべきナシ・チャンプルーは、手軽に地元の味を知ることができる、そしておなか満腹になる、ありがたい一皿だ。UBUD近辺にも数ヶ所あるナシ・チャンプルー店の中でもここ「Kacu」は、地元バリ人の絶大なる人気を誇っている。場所は、パダンテガルのケチャ・ダンスが観られる集会所から、モンキー・フォレスト通りのサッカー場にぬける道にある。小さなカンバンの目立たないワルン（食堂）なので、見落とさないように。店に入ると、ここで食べるか、包んで帰るか聞かれるので、「Makan disini」（ここで食べます）あるいは、「Tolong bungkus」（包んでください）と答える。値段は人により、また入る具の量により、Rp1.000～Rp1.500くらい。ガラスケースの中に盛りだくさんのおかずを入れてくれている間にも、地元の人々が次から次にやってきて注文する。営業時間ははっきりときまっておらず、朝から夕方まで。夕方遅いと、おかずが残り物で貧相になるのでなるべく昼過ぎまでには行きたい。安くて、おいしくて、ボリューム満点、旅人の胃袋の力強い味方になること、うけあいだ。



## 私の常宿

Pudja Arsri

酒井 郁子

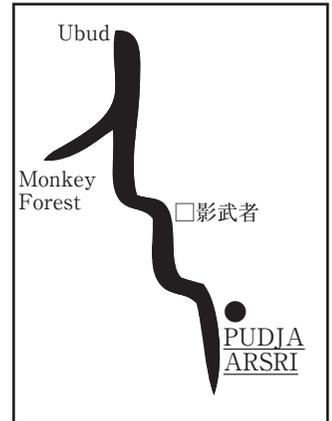
Pudja Arsri は UBUD の中心から徒歩で 20 分、自転車で 10 分の Pengosekan にあり、バンガロースタイルの部屋がライスフィールドの中に建っている。

今や UBUD では、建築ラッシュのために、ライスフィールドがほとんど無くなってしまったが、ここ Pengosekan には、まだそれが残っている。同じような店が ぎっしり建ち並ぶ UBUD の中心とは違って変わって素朴で、景色がど〜んと開けている Pengosekan を、私はすごく気に入っている。さら

にアグン山を望める場所は、Pengosekan でもなかなかないのだ!! Pudja Arsri からみえる朝焼けの頃のアグン山は、非常に美しい。

部屋数は少ないが、庭が広くのんびりできる。そこにはロータスの池があり、その花は毎日絶えることなく咲いている。夜はしっとりと静かで、カエルや虫の鳴き声につつまれてホタルの飛び交う光を見ていると、なんとも懐しい気分になってくる。

私は 6 カ月間で何回も引っ越したが、結局、一番初めに泊った Pudja Arsri に戻ってきて、腰を落ち着けている。



## Pesan &amp; Kesan

## 旅人一声

古賀 由季子

9ヶ月ぶりのBALI。まだ3回目、UBUDは2回目だけど、私はここが大好きです。今回は11日間(正味9日)と前より長めで、嬉しかったです。毎日毎日散歩して、Nata RajaでTingklekを習って(ちょっと大きいのを買ってしまった)、大好きなLegongやプリアタンのKecak(Bonaよりおすすめよ。毎週木曜日のスマラ・マドヤ)をいっぱい見て…。仕事のことを忘れて、めいっぱい楽しみました。今日初めてベモに乗って、デンパサールまで行ったし。(ぎょうぎょうづめのベモが楽しかった。危うくボラれかけたけど)

なんといっても最大の思い出は、プリアタンとブンゴセカンのオダランに行ったこと。あちこちにベンジョールが出て目にも楽しかった

し、クルンクンのパサールで買ったサロンを着て、お祈りもして…。Dalem Puriでレゴンとラマヤナを見て屋台でBaksoを食べて、次の日はPengosekanでチャロナランを見て(バリ語で全然わからなかったけど)、周りの人が笑っているのが面白かった。

会社の人に頭を下げて来たかがありました。有給を使い果たしてしまったので、次はいつになるかわからないけどまた戻ってきたい。みなさんお世話になりました。次に来る時はもっとインドネシア語を話せるように頑張ります。

Saya ingin kembali ke BALI lagi! Terima kashi banyak.

## その他のニュース

■ボンゴセカンに長期滞在の大阪のK子さん(23)は、N氏の主催する『年忘れ食事会 in バリ・クリフ・リゾート』に参加することになりました。総員8名は、日本料理店「飛鳥」で緊張気味に席につき、すきやき、寄せ鍋をつつくことになりました。スポンサーN氏の好意により、他に刺身、てんぷら、寿司とメニューの総ざらえでありました。N氏の「今日は遠慮しないでくださいよ」という神様のような声に、みんなは、もずくの酢の物、塩からと、いたって遠慮がちな注文。しかし、Kさんは、うなぎの蒲焼き、ステーキと遠慮知らずのズバズバ発言。これにはさすがの悪友たちも、あきれ顔。日頃、質素な食事のKさんは、ここぞとばかりに理性を失うほどの食べまくり。「みんなで食べようね!」「お皿をまわしてね!」の声にも、Kさんは自分の目の前で、「は〜い」とくるくる皿をまわし、仲の良いH美さんに「冗談でやっていいことと、悪いことがあるのよ!」と真剣に怒られる始末。この仕打ちがたたったのか、Kさんは次の日に胃を悪くして、一日中、床の中。Kさんの反省の言葉は「日頃、食べつけないものは、控えめに」「おごりだと思って、調子にのらない」でした。

■1994年1月2日、居酒屋『影武者』前にて、餅つきが催されました。影武者のスタッフI氏の念願の夢であった、UBUDでの餅つきが、構想1年目にして実現したわけです。I氏の手作りの杵と臼は、少しいびつで周りからの厳しい批判もありましたが、餅はみんなの協力で、上々のつきあがりでした。まずは鏡餅を作り、その後つきたての餅を、大根おろし、あんこなどにつけ、食しました。バリで食べる餅は、また格別の美味しさでした。

応援に駆け付けてくれた、ジェゴグのグループ：スアール・アグンの和子さんの陣頭指揮で、餅つきがスムーズに進行しました。昔とった杵柄といっは大変失礼ですが、杵を持つ姿といい、餅を返す手さばきといい、さすがに堂にいったものでした。シダの葉、しめ飾りで鏡餅を作ることも、和子さんの指導でした。まさかバリでこんな本格的な鏡餅ができるとは、参加したみんなもびっくり仰天でした。

また、スマラ・ラティのリーダー：アノムさんとアユさんも家族で参加してくれました。アノムさんの初体験の餅つきは、杵さばきも艶やかに、また華麗に且つ優美におこなわれ、「さすがアノム!」と声がかかるほどでした。

さらに、プリアタン・プリ・カレランのラーマさんも家族で参加してくれました。ラーマさんと恭子さんコンビの餅つきもアットホームな雰囲気がつたわり、微笑ましいものでした。また、ラーマさんの杵をおろす力強い姿は、将来のマングラ家を象徴するかのよう頼もしいものでした。

その他、昨年結婚したチョ・アグンとジェロ。ほか沢山のツーリストが参加して、バリの人々とともに餅つきを楽しみました。



■東京都在住の男性：H氏(38)は、風土病の一種であるUBUD病(医学?用語---UBUD熱愛症候群)に認定されて3年になります。今年1月のUBUD病定期検診の結果、H氏が新たに二つのUBUD病に感染したことが確認されました。

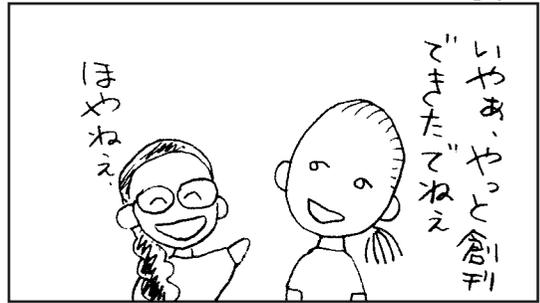
ひとつは「帰りたくない病」で、日本への帰国前日に発病することが多いようです。症状としては、胸がいたみ、後ろ髪をひかれる思いがし、涙が出ることもあるようです。飛行機の搭乗時間が近づくとつれ、いたみは一層激しくなるようです。もうひとつは「帰ってきてしまった病」で、日本の空港に着いた途端、極度に状態が悪化するようです。症状は、仕事などが手に付かなくなり、ほ~とした放心状態の日々が続くようです。これはトランス性UBUD病とも呼ばれています。

これらの症状は、UBUDでの滞在状況により、かなりの差があるようです。治療法としては、現在のところ良薬が開発されていないため、UBUD病のしおり『極楽通信:UBUD』を年間購読するか、UBUDにて自然療養の方法しかないようです。

■「スマラ・ラティとファンの集い」が、1月9日、カフェ・ラティにて開催されました。スマラ・ラティの演奏と踊りは、いつものように素晴らしく、また感動的に終わりました。終了後、会場ではリーダー：アノム氏の父親であるコンピアン氏の自慢のラワール料理がもてなされ、メンバー、ファンともども、舌鼓を打ちました。会食、歓談は、和気あいあいとした雰囲気うちに進行されました。メンバー、ファンから、この会を毎年催したいという声があがり、「スマラ・ラティとファンの集い」を、正月の恒例行事とすることに決まりました。みなさんも、来年は是非、参加してみたいはいかがですか。

最後に、アノム氏がスマラ・ラティの今後の一層の飛躍を力強く約束して、会は終了しました。

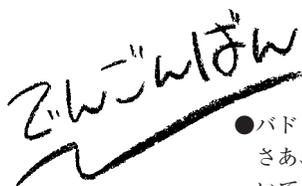
その1  
ほりり



【年間購読申込み方法】

エアメールで、その旨手紙をください。宛先は「影の出版局:伊藤」、住所は巻末のBALI本部です。料金は、¥3,000.-。おりかえし申込み用紙と送金方法をお知らせします。

Name	Point	Address / Tel	
Semara Ratih	あのスマラ・ラティのリーダー、アノムそしてアユがコーチしてくれる。宿泊設備有。	Jl. Kajeng 25, Ubud Tel. 96277	ダンス、ミュージック
Puri Agung	プリアタンの王宮でも習えるのだ！ 宿泊設備有。	Peliatan	ダンス、ミュージック
Mandara	御存知、ティルタ・サリのご本家。宿泊設備有。	Peliatan	ダンス、ミュージック
Gunung Merta	日本語のできるババ・イダ・バグース氏が相談にものってくれる。宿泊設備有。	Andon Tel. 975463	ダンス、ミュージック
Nata Raja	STSI (芸術大学) 出身のワヤン氏は、マルチ・ティーチャー。	Jl. Sugriwa, No.20, Ubud	ダンス、ミュージック
Wayan Karta	カルタ氏本人はガイドだが、家族はダンサー・ミュージシャンが粒ぞろい!	Jl. Suweta, No.16, Ubud Tel.975730	ダンス、ミュージック
Kompiang	まだ若いが、STSI 出身の踊りは確か。気軽に習えます。妹達もコーチ OK!	Pengosekan, Ubud	ダンス
Dewa Berata	あのスマラ・ラティのクンダン (名物男!) 奏者。STSI 出身。お父さんから、4人の兄弟みんな音楽一家。	Pengosekan, Ubud	ミュージック
Gusti Sana	SANA 氏独特の、カエル百態、ちょっとエッチなタッチ。とてもやさしい先生。	Pengosekan, Ubud	ペインティング
Budiana	D. ボウイーも持っている、プディアナ先生の摩訶不思議な、エロティックなスゴイ絵、あなたも描けます。	Jl. Hanoman	ペインティング



Pengumuman

●バドミントン同好会・メンバー募集

さあ、みなさん一緒にバドミントンで汗を流しましょう。もう、充分汗をかいてるあなたも、よろしかったら参加してください。

連絡先: 居酒屋『影武者』裏、長屋住まいの恭子

●UBUD にソフト・ボール・チームを作りたいと思っています。物置に眠っている、グローブ、バットなどの道具を譲ってください。

連絡先: 居酒屋『影武者』スタッフ

●世界各国の蚊取線香の空箱を集めています。日本のきんちょう、インドネシア、シンガポール以外の蚊取線香がありましたら、オレ・オレ (土産) に持ってきてください。

連絡先: 居酒屋『影武者』伊藤



●ヌガラのジェゴグを UBUD にて、チャーターしたいと思います。是非、観賞したいという人は、旅行の日程を早めにご連絡ください。

連絡先: 編集室

【伝言板は読者が自由に使うコーナーですので、どしどし寄稿してください。】



Terima Kasih



発行人：伊藤博史

編集：伊藤博史 / Yumi. S / Mansha / 堀 祐一

エディトリアルデザイン：菅原恵利子

写真：小原孝博 / 堀 祐一 / 菅原恵利子

カバーデザイン：堀 祐一

ロゴデザイン：Hiroko. S

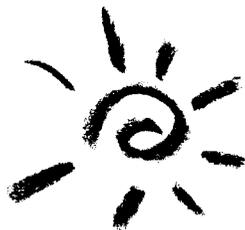
極楽通信「UBUD」Vol. 1

1994年2月25日発行

発行・販売：影の出版会

Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wighraha  
Jl. Suweta No.16, Ubud. Bali,  
80571, Indonesia tel.(0361)96134

©1994 影の会出版会 禁無断掲載





影の出版会事務局

- BALI 本部 Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha Jl.Suweta No.16, Ubud. Bali, 80571, Indonesia tel.(0361)96134
- 日本連絡先 〒 106 東京都港区麻布台 3-4-4 Iikura Comfy Homes B-102 ボトムック株式会社内, tel.03(3583)0801 fax.03(3583)0803